



私の3冊

細田忠博

後輩に薦める2冊

フロレンス・ナイティンゲール（著） 小玉香津子、尾田葉子（訳）

看護覚え書き 本当の看護とそうでない看護 日本看護協会出版会，2004年発行

リハビリテーション専門職として、生活を考えることは“当たり前”だと考えているかもしれませんが、しかし、自分たちが生活を評価するなかで、いかに狭い視点のなかで判断をしているのか気づかされる本です。看護とは何か、自宅での生活に必要なことは何か、どのように生活を管理していくのかを具体的な例を挙げて説明しています。また、病気とは何か、健康とは何かを学ぶきっかけとなる1冊です。

上田 敏（著）

ICF（国際生活機能分類）の理解と活用 人が「生きること」「生きることの困難（障害）」をどうとらえるか きょうされん，2005年発行

ICFは、すべてのリハビリテーション専門職が知っている共通言語かと思えます。しかし、重要なことは本書で紹介されているように、「基本的な“ものの考え方”」にあります。ICFの考え方を正しく理解し、クライアントの全体像を把握し、生きることの困難を理解することは、臨床の場で絶対的に必要なことです。そのために、この1冊は必要な本かと思えます。何度も読み返す本です。

自分の1冊

エリザベス・タウンゼント、ヘレン・ポラタイコ（編著） 吉川ひろみ、吉野英子（監訳）

続・作業療法の視点 作業を通しての健康と公正 大学教育出版，2011年発行

私自身が、「作業療法士の専門性とは何か」、と悩み立ち止まるときに読んでいる本です。「作業療法士ってこんなこともできるのか」、「自分は本当に限られたなかでしか考えられていなかった」と気づかされます。そして、前に進むことができる本です。在宅で生活を送るクライアントは、本人だけではなく一緒に生活をしている家族、隣人、文化、土地などさまざまな外的要因に影響を受けます。作業療法士は、内的要因に対してアプローチをするだけではなく、外的要因に対してアプローチを行うことが可能です。それを教えてくれる本です。

■ほそた・ただひろ 作業療法士13年目 医療法人社団青洲会神立病院ケアセンター元気館

訪問リハビリテーションに10年従事し、現在は通所リハビリテーションに携わっている。茨城県では行政と各専門職団体が連携し、地域リハビリテーションを実践している。そのなかで、作業療法士が自分の専門性を幅広い視野で実践していくために、上記の3冊はさまざまなヒントと道筋を示してくれるものと考えている。